様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ３０ 日現在

機関番号：３２６３０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０３２３１

研究課題名（和文）「共同養育」（co-parenting）が先導する新たな家族に関する人類学的研究

研究課題名（英文）An Anthropological Study on the Emerging Family Building through Co-parenting

研究代表者
上杉　富之（UESUGI, TOMIYUKI）

成城大学・文芸学部・教授

研究者番号：００２５００１９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近年、欧米の一部の国で徐々に認知されるようになってきた性的マイノリティ（LGBTIQ）の新たな子どもの作り方ないし育て方、「共同養育」（co-parenting）に注目し、現在、世界的な規模で進行している親子・家族・結婚の変動とその背景にある「性」（sex、gender、sexualityなど）のあり方の変化の実態の一端を、関連文献の批判的検討並びにアメリカ及びオランダにおける人類学的なフィールド研究を通して明らかにした。その結果、ゲイ／レズビアンカップル等が共同養育等の新たな実践を通してこれまでの家族や親子、結婚のあり方や見方・考え方を根本的に再編しつつあることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究で得られた知見は、近年、欧米等を中心に認知されるようになってきた性的マイノリティ（LGBTIQ）の新たな子どもの作り方ないし育て方、「共同養育」（co-parenting）の実態を明らかにするという学術的価値を有するとともに、そうした実践がややもすると硬直しがちな親子や家族・結婚、「性」（sex、gender、sexualityなど）のあり方を柔軟かつ多様なものに再編することを示したという点で広く社会的な意義も有する。

研究成果の概要（英文）：Focusing on a new way of making or raising children with sexual minorities (LGBTIQ) "co-parenting," which has been gradually recognized in some Western countries in recent years, this research revealed the current state of the changes in parent-child/family/marriage and the underlying “sexuality” (sex, gender, sexuality, etc.), that is currently underway on a global scale, by critical review on the related written materials and field researches in the United States of America and Nederland. As a result, it became clear that sexual minorities such as gay/lesbian couples are fundamentally reorganizing their families, parents and children, the way of marriage, their views and ideas through new practices such as joint parenting.

研究分野：文化・社会人類学

キーワード：文化・社会人類学　親子・家族・結婚　性的マイノリティ　LGBTIQ　共同養育（co-parenting）　アメリカ　オランダ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年、世界的な規模で親子・家族・結婚観や制度が大きく変動している。例えば、社会学者のJ. J. Macionis & K. Plummer（*Sociology: A Global Introduction*,2012）らは、家族のあり方は、「家族である」(being family) から「家族をする」(doing family)、あるいは「家族になる」（becoming family）へと移行したと指摘する。すなわち、家族はアプリオリに存在するのではなく、日々の家族としての実践の積み重ねが家族を作るというのである。また、同性愛者が形成する家族の研究を行ったK. Weston（*Family We Choose*, 1991）やV. Lehr（*Queer Family Values*, 1999）は、男と女が結婚することによって作る家族は今や「選択」されるべきさまざまな家族の中の一形式に過ぎないと主張する。さらに、J. Carsten（*Culture of Relatedness*, 2000）は、親子や家族関係は、かつて信じられていたように生物学的紐帯（血やDNAなど）や法的紐帯に基づくというよりも、むしろそれをも含んださまざまな関係性（relatedness）の中で理解されるべきだと結論づける。こうした議論の根底にあるのは、親子・家族・結婚はすでに出来上がったものとして存在しているのではなく、私たちが日々の生活の中で維持したり作り直したりするからこそ存在しているのだ、あるいは、そうあるべきだという考え方に他ならない。

このような親子・家族・結婚観の変動をもたらした要因の一つは、かつて「生殖革命」(The Reproduction Revolution）とも言われた、体外受精や胚移植技術等の先端的生殖技術を用いた生殖補助医療（Assisted Reproductive Technology。以下、ARTと略述）の急速な進展と拡大・普及である。今やARTは欧米先進国や日本のみならずイスラエルやインド、タイ等、中東や南米の発展途上国にまで拡大・普及している。そして、ARTのグローバル化はただ単に生殖医療の問題にとどまらず、親子・家族・結婚観や制度のあり方を根底から変革しつつある。

以上のような問題意識に基づき、私（上杉）はARTの実用化の実態とそれがもたらす家族の変化に関する科研費を用いた調査を長年にわたって実施し、その成果は関連分野の研究者から高い評価を受けてきた。

ところで、こうした調査研究を実施していく中で生殖補助医療をめぐる社会的・文化的な環境ないし状況は大きく変わった。ARTは当初異性愛カップルの不妊治療技術として導入・実用化されてきたが、アメリカの同性愛カップル等の性的マイノリティ（LGBTIQ:Lesbian, Gay, Bisexual, Intersex, Transgender, Questioning/Queer）の間では、1990年代の半ば以降、配偶子（精子／卵子）提供者や代理母等と「協力」(共同）して子を作り家族を形成する有力な手段の一つとして利用されるようになってきている。そのような子育て実践やその結果形成される家族は、本来は離婚後の夫婦が「共同」で子どもを育てることを表現するために作られた言葉である「共同養育」(co-parenting）や「拡大家族」(extended family）などと呼ばれている。そして、アメリカの性的マイノリティにおけるこの種の試みは、2000 年代以降、法的にも徐々に認知されるようになってきている（V.Lehr, *Queer Family Values: Rethinking the Myth of the Nuclear Family*,1999; M.L.Shanley, *Making Babies, Making Families*,2002; A.B.Golodberg & K.R.Allen eds., *LGBT-Parent Families*, 2013他)。

一方、日本では長らくこの種の子作り・子育てや家族が存在しないものとされてきた。そのため、「共同養育」や「拡大家族」がすでに存在し、そうした実践が日本の親子・家族・結婚のあり方を根本的に変革する可能性があるとの認識もなく、これまでまったく研究されてこなかった。

以上の研究状況にかんがみ、本研究は、性的マイノリティたちが実践している新たな子作りや子育て、「共同養育」と、その結果として形成される「拡大家族」に注目し、日本やアメリカ、オランダ等において調査を実施し、現在世界的な規模で進行している家族の変動の実態の一端を明らかにすることを目的とした。そしてまた、その成果に基づき、将来的な親子・家族・結婚観や制度の可能性を実証的、理論的に検討することを試みることとした。

２．研究の目的

本研究は、近年、欧米の一部の国で徐々に認知されるようになってきた性的マイノリティ（LGBTIQなど）の新たな子どもの作り方ないし育て方、「共同養育」(co-parenting）に注目し、現在、世界的な規模で進行している親子や家族、結婚の変動の実態の一端を実証的な調査研究を通して明らかにすることを目的とした。また、そうした調査データの分析・検討に基づいて、将来的により柔軟な親子や家族、結婚のあり方を提示することを目指した。

３．研究の方法

本研究では、当初の目的を達成するために、以下のような方法やステージを踏んで研究を実施した。
（１）第１ステージ：世界的な規模で進行している親子や家族、結婚の変動について、特にアメリカやオランダ等で実践されている「共同養育」や「拡大家族」等の新たな家族形成に関連した新聞や雑誌記事、論文、報告書、専門書等を批判的に検討し、今日の動向や潮流の概要を確認する。そのうえで、次のステージで実施する現地調査の準備をする。
（２）第２ステージ：「共同養育」や「拡大家族」の実践がもっとも急速かつ広範に拡大しつつあるアメリカやオランダにおいて、性的マイノリティ当事者や彼らを支援するＮＧＯ、法律専門家、共同養育斡旋会社等を対象とするインタビュー調査等を実施してデータを収集する。
（３）第３ステージ：第２ステージの現地調査で蓄積したデータを分析・検討し、性的マイノリティが実践する「共同養育」や「拡大家族」が親子や家族、結婚観や制度に及ぼしつつある影響を実証的に明らかにする。また、それらが私たちの社会や文化のあり方全般をいかに変える可能性があるのかについて、社会的・文化的な複数性（多様性、多層性、多元性）の観点から理論的に検討する。

４．研究成果

以下、まず「３．研究の方法」で述べた「ステージ」ないし方法に対応させて研究成果の概要を述べ、その後で「２．研究の目的」に対応させて研究成果を概括する。

（１）研究の方法・ステージに対応させた研究成果の概要

①「第１ステージ」の、世界的な規模で進行している親子・家族・結婚の変動に関する新聞、雑誌記事や関連文献の批判的検討の結果、アメリカやオランダ等の性的マイノリティカップルのコミュニティにおいて、彼ら／彼女らが配偶子（精子／卵子）提供者や代理母等とともに「共同養育」を行い、そうした実践に関与（参加）する者が時として「第二の親」（second parent）などと位置付けられ、「拡大家族」の成員とみなされるようになっている事実を確認した。こうした研究成果の一部は、関東生殖医学会の特別講演、「生殖補助医療をめぐる近年の社会的・文化的な変化と新たな倫理的問題」において口頭で発表し（2019 年 2 月 16 日）、産婦人科医等の医療従事者に対して、性適合手術後の法的な性の変更（戸籍上の性の変更）が合法化され「同性パートナーシップ」条例が制定されるようになった今日の日本においても、近い将来（あるいはすでに）、LGBTIQ 等の性的マイノリティカップルを中心に「共同養育」や「拡大家族」のような新たな親子や家族、結婚のあり方の可能性を検討する段階、時期に来ていることを指摘した。

②「第２ステージ」の「共同養育」や「拡大家族」の実践に関する現地調査については、2020 年 3 月にオランダのゲイカップル及びレズビアンカップルに対してインタビュー調査を実施した（2020 年 3 月以降の新型コロナウィルス感染症の拡大にともない一部は Skype や ZOOM を通したビデオインタビューとして実施）。その結果、彼ら／彼女らは最初から「共同養育」や「拡大家族」を目指していたわけではなく、カップルで、あるいはカップルの一方が子作りをした後に「共同養育」に至り、その結果、「拡大家族」ないしそれに類似した「子育てコミュニティ」のメンバーとなっていることが明らかとなった。これらの研究成果については、近々、口頭ないし報告書、論文として公表すべく準備を進めている。

③「第３ステージ」の現地調査資料の実証的な分析、検討と、それに基づく将来的な親子や家族、結婚観や制度、さらにはより広く社会・文化のあり方の可能性を複数性（多様性、多層性、多元性）の観点から理論的に検討するということについては、現地調査を終了した今、分析・検討を進めており、早急に口頭ないし論文として公表すべく準備を進めている。

（２）研究目的に対応させた研究成果の概括

以上のごとく、本研究は、当初の目的通り、欧米の性的マイノリティ（LGBTIQ など）が試みている新たな子どもの作り方ないし育て方、「共同養育」（co-parenting）の実証的な調査研究を通して、現在、世界的な規模で進行している親子や家族、結婚の変動の実態の一端を明らかにした。また、そうした調査研究に基づいて、将来的により柔軟な親子や家族、結婚のあり方を提示することも試みた。

なお、「『共同養育』（co-parenting）が先導する新たな親子や家族、結婚等に関する人類学的研究」の成果は、テーマ・トピックとしてはかなり異なるものの、私が同時並行的に進めている「グローカル研究」（グローバル化とローカル化が同時かつ相互に及ぼしつつ進行するグローカル化に関する理論的、実証的研究）と「複数性（多様性、多層性、多元性）」に関する研究という点では軌を一にしており、グローカル研究にも反映させている。その意味で、以下に述べる本研究の「主な発表論文等」の中にもグローカル研究に関する成果を併記している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Uesugi, Tomiyuki	４．巻 ----
２．論文標題 “Glocal Studies”: Formulating and Conducting Studies on Glocalization,	５．発行年 2016年
３．雑誌名 T. Uesugi and M. Yamamoto (eds.), The Perspective of Glocalization, Center for Glocal Studies, Seijo University,	６．最初と最後の頁 9-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 上杉富之	４．巻 33（輯）
２．論文標題 「『グローカル研究』の課題と展望についての覚え書き－ローカルの人やものとその働きかけに焦点を当てる－」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『日本常民文化紀要』（成城大学文学研究科）	６．最初と最後の頁 (1)-(28)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 上杉富之	４．巻 ----
２．論文標題 「グローカル研究の構想とその射程」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 成城大学グローカル研究センター（編）『グローカル研究の理論と実践』（東信堂）	６．最初と最後の頁 5-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　6件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 上杉富之
２．発表標題 “‘Glocal Studies’ as an Approach to Visualize ‘the Invisible’ and Equalize ‘the Power Imbalance’”
３．学会等名 (Social Science Korea (SSK) Glocal Culture Development Research Division, University of Seoul and Konkuk University, Conference Hall, Law School, University of Seoul, Seoul, Korea.（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 上杉富之
２．発表標題 「『グローカル研究』という試み―グローバル化時代の社会と文化の捉え方―」
３．学会等名 台湾・淡江大学日本語文学科・台湾日本語教育学会・淡江大学村上春樹研究センター主催、2017年台湾日本語教育国際シンポジウム「日本語教育のグローカル化」（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Uesugi, Tomiyuki
２．発表標題 “Glocal Studies: Formulated and Practiced at the Center for Glocal Studies, Seijo University, Japan”
３．学会等名 International Symposium, "Theories and Practices of Glocalization Studies in Europe and East Asia," Seijo University, Tokyo, Japan.（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Uesugi, Tomiyuki
２．発表標題 “The Glocal Perspective: Envisaging and Conceptualizing the Empathetic Society and Culture”
３．学会等名 2018 GCSE International Conference “Cultural Dynamics of Social Empathy Conference,” Center for Glocal Culture and Social Empathy, Natural Science Building, University of Seou, Seoul, Korea.
４．発表年 2018年

１．発表者名 上杉富之
２．発表標題 「『地域学』の誕生とその今日的意味―グローカル研究の観点から」　(The Birth of the Study of Locality and Its Socio-cultural Implications: From the View Point of Glocal Studies)
３．学会等名 International Symposium “Local Humanities and Local community: International Case for Develo9pment of Area Studies,” Seoul Theological University, Bucheon, Korea.（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 上杉富之
２．発表標題 「生殖補助医療をめぐる近年の社会的・文化的な変化と新たな倫理的問題」
３．学会等名 関東生殖医学会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 上杉富之
２．発表標題 「『グローカル』」という見方、考え方―『ローカル』」からの働きかけを焦点化する』
３．学会等名 静岡文化芸術大学「持続する地域と地球をグローカルにデザインする」パネルディスカッション（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 Uesugi, Tomiyuki and Yamamoto, Matori (eds.)	４．発行年 2016年
２．出版社 Center for Glocal Studies, Seijo University,	５．総ページ数 170
３．書名 The Perspective of Glocalization: Addressing the Changing Society and Culture under Globalization	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考